

# 日本伝統文化の継承と発展

## —尺八音楽を中心にして—

702-022 吉村博生 指導教官 千葉 貢

Continuance and Development of Japanese Traditional Culture:  
On the Focus to *Syakuhachi* Music in Japan

Hiro YOSHIMURA

### I はじめに

現在では学校でも家庭でも、教育は知識の習得に主眼が置かれ、従来からの伝統文化が担ってきた生活上の知恵、物の考え方、人間性の練磨、道徳・倫理観の確立、技能・技術の習得、社会教育等の履修は難しくなってきた。加えて、不便や苦痛の回避、物、金、情報の欠乏、不条理等をも出来るだけ回避するよう社会も親も子供も意識して努力してきた。その結果、困難な状況や障害を努力、工夫、忍耐等によって克服した時や、その過程で獲得する精神的な豊かさ、すなわち達成感、満足感、幸福感、安心感、癒し(安らぎ)の獲得及び次のステップへのエネルギーを醸し出す方法もまた回避されてしまった。それ故個人的にスポーツトレーニング、精神修養に励んだり、資格試験を目指したり、尺八やお茶等の伝統文化に意識的に挑戦したりする自己教育で、不便、苦痛、苦しさ、等を自分に課して達成感、満足感、幸福感、安心感等を得なければならない時代になってきた。また既成の規則やマニュアルで受け身的に動き、携帯電話やパーソナルコンピューター等で顔の見えない対話が増加している。

このような不安や不満にかられる現代社会にあって、孤立化、無関心、自己中心的になりがちな人間関係を修復し、個々の命の質を高め、家庭、組織、地域などの横の結束や連携を強化し、活性化を推進するのは、日本伝統文化の持っている内に秘められた連帯や帰属意識の認識とその活用にあると考える。

この原動力の核心は「顔と顔を合わせた全人格による『生きた心の動き』を伝達する仕組みである」と私は考える。この認識を基盤として日本伝統文化の継承と発展について尺八音楽を事例に考

察した。

## II 日本伝統文化の継承の意味と本質について

日本伝統文化の持っている潜在的な力の一つに「人のふり見て、我がふり直せ」という諺があるように、言葉や文字で表現出来ない知識の「暗黙知」がある。この知識は人間一人一人の体験に根ざした個人的な知識であり、言葉によって表すことの出来ない「知」を意味している。私はこの「暗黙知」の概念を具体的に「師匠は、自分の習得した技、知識、精神、及び社会活動等を総動員した生身の全人格を媒体にして、弟子に伝統の『生きた心の動き』を直接伝える」と定義し、本論では「暗黙知」と表現することにした。顔と顔を合わせて全人格での対話による「生きた心の動き」を伝える「暗黙知」の伝達方法と人材養成の方法こそ、日本伝統文化の継承の本質であり、知恵の核心であると考え。具体的には、私が40年以上続けてきた都山流尺八教授の経験を基にして尺八音楽の「暗黙知」の伝達方法と人材養成の仕組みを、徒弟制度の<sup>ウツ</sup>コツの伝授、禅の修業による悟りの面から考察した。

## III 尺八音楽の過去・現在・未来への流れについて

尺八の過去については、音は消滅し、文献資料も少なく不明な点が多いものの、大きく分けて古代尺八、一節切尺八（ひとよぎり）、普化尺八の3世代を経て現在に至っている。現在の尺八は普化尺八の流れを汲んでいる。廃れていった音楽、楽器も多いが、尺八が生き残ってきた理由として、尺八の音は、音量、音色、音域などの面で人の声とほとんど同じ域であり、コブシを多用する演歌や民謡の歌唱法とよく合致した点が挙げられる。尺八一管だけの音量は小さくて、大きな音量の必要な会場での演奏には適さないが、近年の増幅技術の進歩で大ホールでの演奏も可能になってきている等、機能面、理論面に新しい内容を持っており将来性を秘めた楽器である。

また各時代の支配層に愛好されたことも継承されてきた理由の一つである。しかし支配層が衰退すると尺八も衰退する運命にあった。尺八の未来は社会の各層に、すなわち政界、宗教界、教育界、カルチャーセンター、公民館活動、生涯教育等にどのようにして進出するかにかかっている。その基盤として家元制度を見直し、師匠一人一人の力を結集する組織を創り上げることが必要である。

現在、尺八音楽に興味を示したり演奏を聴いたり、ましてや演奏出来る人口（尺八人口）は減少している。それは、尺八人口の高齢化や若年層の参入が少なく先細りであるが、このまま何も手を打たなければ、現在の延長線上に未来はないと私は予測している。このような状況下での尺八音楽の活性化は緊急の課題である。真正面から取り組むべき時が「今」であると切実に思っている。

本論では、師が参禅した弟子に「無手の人無弦の箏を弾く」という公案を与えて、弟子の「なにもないから弾けません」という答えに対して、頭を殴り追い返して、弟子の後ろ向きの心構えを前

向きに切り替えさせた例を引用した。尺八音楽の未来については、現時点で言えることは私を含めた師匠達を前向きの心構えに変換出来れば、未来は「ある」であり、変換しないで今の状態のままでは「ない」という回答になる。

まず年配の師匠が危機感に目覚め、「なんとかしなければならぬ」という前向きの心構えになることが先決急務である。そのための再教育の場として支部の役員に推薦するとか、指導者講習会や邦楽発表会への出演、新曲講習会等を家元や支部の行事として企画・実施する必要がある。同時に分野は異なるが明治の初期に柔術を柔道に一本化して現在の世界の柔道になったように、流派の壁をとりはずした尺八音楽として一致団結の方向も探る必要がある。

師匠が生き生きしてくれば、弟子達も生き生きしてくる。その弟子達の興味や関心を促すための「学習するシステム」作りも必要である。その一つとして、階級制度や免状制度は個人の励みにもなり、力量の客観的な判断材料として社会的にも有効な手段であると評価している。例えば、免状の段階を細分化してピアノやエレクトーンの学習のようにグレード制にして1から10のグレードを師匠が自由に設定し、一定水準以上のグレードから家元発行の免状を与える等の工夫を施すべきである。その他、パソコンを活用する教授方法、かなり高度な知識を公開しているホームページの有効な活用、元気な高齢者達の経験や能力を活かす工夫、女性達と子供達の新たな力を活かす工夫、世界への進出の工夫、これらの中の出来ることを一つ一つ実行していけば、「尺八音楽に未来はある」と確信する。

#### IV 尺八音楽の発展について

尺八音楽の発展について、私は次の5項目の必要性をあげた。①プロの演奏家への期待、②学校教育での邦楽師匠の活動体制の確立、③生涯教育での邦楽師匠の活動体制の確立、④邦楽の基礎研究、応用研究、開発研究の必要性、⑤邦楽演奏用の初心者向けからハイレベル曲の作曲と作曲家への期待、の5項目である。これらの解決私案として師匠の組織化の観点から、学校制度と家元制度の改革試案を提起した。すなわち音楽大学や教員養成大学で邦楽を学んだ若い師匠を家元制度に取り込み、既成組織に、新しい邦楽（広義の音楽）の技量と知識を注入して若い世代への邦楽の理解を促し、教育の面に新しい風を入れることである。また家元制度については運営の透明性と世襲の意義について考察した。免状の発行等の家元の活動は、営業行為にあたるとの大阪高等裁判所の判断（注）により、企業の本店・支店関係を援用して支部への大幅な権限移譲も可能ではないか、との見解も示した。

#### V 邦楽の可能性について

尺八音楽を含めた邦楽の可能性については、邦楽の持っている魅力を活用する音楽療法を真剣に考

える必要があると考えている。西洋医学が入ってくる以前の日本の精神医療は、修業を積んだ祈祷力のある山伏、僧侶、陰陽師、神官等が祈祷や笛や鉦で悪霊を退散させたり集団で踊ったりして、医療行為を行っていた。治療者が精神的に安定している宗教者であり、経験により習得した臨床心理の医師であり、心を開放させる技を持った芸能者であったという、日本の精神医療史の面からも、西洋の精神医学ではカバーできない日本人に適応した音楽療法を考えていく必要がある。その前段階として、心理学、社会学、文学、民俗学及び宗教界等による専門分野の知識や協力で、心の病に対する反応、死に対する覚悟等、日本人の基本的な精神構造にまで立ち入り、そこに働きかける「暗黙知」、音楽、言葉、音、色彩等を探る必要がある。すなわち、徒弟制度、禅等の心の底辺に働きかける「暗黙知」の仕組み。邦楽、歌謡曲、民謡、歌曲等の音楽の働く時と場と人の組み合わせ。連歌、俳句、短歌、川柳、漢詩等、古代の人達の持っていた言霊信仰等の言葉のもっている力。虫の音や、風の音の中に安らぎを感じる音。生け花や水墨画に見られる色彩の心理面に及ぼす力等、薬物に依存しない面での治療以外の基礎的な研究もこの音楽療法を考える際には重要である。ここに医学知識の少ない邦楽演奏者、研究者にも音楽療法の一部に寄与する可能性もあると考える。

## VI まとめ

本論では尺八音楽を中心として日本伝統文化の継承の意味、本質、流れ、発展の方法、発展の可能性等について考察した。いろいろ指摘や提案をしたが、実際やるとすれば私一人の力には限りがあり不可能である。一つの改革試案として提示し、今後あらゆる機会を利用して実行に移して多くの共感者、協力者を得たいと考えている。

### <注>

一審：京都地方裁判所 昭和52年2月24日決定<昭和51年(ヨ)1033号>

二審：大阪高等裁判所 昭和54年8月29日判決<昭和52年(ヲ)第51号>

### <主な参考文献>

後藤和子編著『文化政策学』有斐閣、初版2刷、2002年

石川弘道『経営情報の共有と活用』中央経済社、2001年

田坂広志『暗黙知の経営』徳間書房、1998年

中島雅楽之部「音は生きている」小泉文夫・星旭・山口修編『日本音楽とその周辺』音楽之友社、第1刷、1973年

山本壽夫「吉田初三郎の空間絵になるまちづくりへ」『別冊太陽』平凡社、2002年10月

上野堅實『尺八の歴史』出版芸術社、2002年

平野健次ほか監修『日本音楽大辞典』平凡社、1989年

今泉淑夫編『日本仏教史辞典』吉川弘文堂、1999年第1版1刷

月溪恒子『尺八古典本曲の研究』出版芸術社、2000年

中塚竹禅『琴古流尺八史観』日本音楽社、1979年

吉川英史『日本音楽の歴史』創元社、1965年

## 日本伝統文化の継承と発展

- 岡田富士夫『虚無僧の謎』秋田文化出版、2001年  
山本守秀『虚鐸伝記国字解』京都の升屋庄兵衛、1795年  
柴田南雄『日本の音を聴く』青土社、1987年  
山本邦山『尺八演奏論』出版芸術社、2000年  
西潟昭子監修『日本音楽のち・か・ら』現代邦楽研究所、2001年  
西山松之助『家元の研究』吉川弘文館、1982年  
都山流史編集委員会編『都山流七十年史』都山流尺八楽会、1970年  
都山流史編集委員会編『都山流八十五年史』都山流尺八楽会、1984年